影なる王女

終末の時が来た。
わが麗しき友が。
終末の時が来た。
わが唯一の友が。

殺人者は夜明けに目覚め、ブーツをはいた。
古代の美術館を飾る仮面を着け、
回廊を忍び歩き、
かつて妹が暮らしていた部屋を訪れ、
次に弟の部屋を訪れ、
さらに回廊を歩き、
そのドアの前に立った。
ドアを少し開けてなかを覗いた。
父さん、あんたを殺したい。
母さん、あんたを犯したい。

殺せ！　殺せ！　殺せ！　殺せ！　殺せ！　殺せ！（"The end" by Doors）

第一章

「ここに息長皇后、神がかりしたまいて曰く、西の方に国あり、金銀をはじめて、日の炎耀く種々の珍宝その国に多なるを、吾、その国を汝に賜う」

史人の竹簡を押し広げる音がかたかたと響き、腹の奥底から陰々と口誦するしわがれた声が、檜造りの王宮に響いた。

幾度、書き換えさせたのだろう……。

十五歳の稚建皇子は、背後の母の、強い香りを放つ化粧のはざまから、豊かな四肢より滲み出る体液の匂いを嗅ぎ取っていた。身にまとう、紫に染めた絹ずれの音すら、ひそやかに伝わってくる。

三十路も半ば、多くの男たちに奉仕されたその肉体は、王宮に召された乙女たちの若い肌よりも艶めいた輝きを放つ。里から召され、ざらざらしたその舌で女神の末裔の皮膚を濡らし、そのまま行方知れずとなる男たち。彼らの宿命に、皇子は何の関心も抱かない。ただ、男女の秘め事について知り始めた若い体の内奥にうずくまる疼きが、この母の姿を眼にする度に、魚油にひたした藁の炎が風に吹かれて一瞬舞い上がるように、燃えさかることに、後ろめたい心地を味わう。

広庭に向かって扉を開け放った檜造りの廟堂に座す皇后と稚建皇子、篝火のあかあか

と輝く広庭に跪く百官を前に、老いたる稗田の史人は、墨もまだ乾かぬ「国史」を読み上げていた。

「ここに大王、答え白したまはく、高き地に登りて西の方を見れば、国土は見えず、ただ大海のみあり。ここにその神いたく怒りて、幾久もあらずして、崩御したまう」

皇子の父、先のの大王の死。幾度も寝物語に、母なる皇后は皇子の耳に吹き込んだ。汝が父は、神より西の国を賜るとの託宣を聞きながら、黙すばかりであった。ゆえにお隠れになった。母はその頃、皇子を腹に宿していた……。

「皇后、軍を整え、船集め、西の国に渡りたまいき。海原の魚ども、大きも小さきも、ことごとく御船を負いて渡りき。御船の波、西の国に押しあがりて、すでに国の半ばまで到りき。その国の王、おそれかしこみ、種々の珍宝を皇后に献上せり」

群臣が、おお、とどよめき、手を叩き、十五年前の壮挙を讃えた。皇子は、背後で皇后が微笑むのを感じた。見ずとも分かる。ふくよかな白い貌をゆったりと動かし、唇を左右に広げる。だが、その眼に宿るのは、鈍い嘲りの光。

群臣も民も、皇后を恐れ畏まる。稗田の史人が竹簡に書き記すように、軍を興して西なる国を攻め、服属せしめたからではない。西の国の王が皇后に捧げたという珍宝はいずくに蔵されるか。誰も、それを見た者はない。

皇子がものごころついた頃、王宮の広庭に兵が集められては駆け出し、血にまみれて帰還し、幾日もへずしてまた駆け出し、庭に滴る兵らの血がおびただしく白く敷き詰めた

砂に染み込んだ。昨日まで皇后のもとに侍っていた豪族は、朝には首となって皇后の眼前に転がった。その都度、群臣は、大王家の御稜威を讃えた。

皇子が十歳となる頃、世はようやく静まり、兵乱の騒ぎは収まった。だが、あいかわらず王宮に伺候する群臣の顔ぶれは、いつの間にか一人消え、一人消え、かわりの新顔が消えていった者の空席を埋めた。

母なる皇后の傍らには、常に三人の宮女が侍る。いちばん年かさの八須女は、母と同じ齢くらいか。ふっくらした頬に、三日月のような眉。香和女は二十歳の半ば。尖った顎に、常に微笑みを絶やさぬ唇。皇子と齢のかわらぬ葉津女は、年に似合わぬふくよかな胸乳に長い手脚。

王宮に侍る女は、ヤマトの大王家の支えとなる豪族の娘のはずだが、誰も、この三人がどの家の出自かを知らない。だが、葛城、大伴、平群といった威勢ある諸豪族も、彼女らの鼻息をうかがい、肩を狭めているしかない。

なぜか。そのわけを、皇子は十二歳のときに知った。

父なる大王が亡くなった後、その後継たる大王は不在だった。母なる息長皇后が独り政事を司り、「女王」と陰でささやかれつつも、大王の御位に即くことはなかった。

「若武の皇子が壮齢となり大王となるまで」、ヤマトの大王位には誰も即くことはない、と宣言していた。

皇子はそれを知ったのは、十歳の頃だった。

しかし……、と皇子が不審に思ったのは十二歳の頃だった。

大王ならば、押歯皇子がいるではないか。皇子より六歳の年長。素手で荒鹿をくびり殺した大力の持ち主。粗野で険のある貌ゆえか、彼を好む者はいなかったが、二人しかいない大王の忘れ形見である自分と押歯皇子をくらぶれば、いずれが大王にふさわしいかは明らかだった。否、自分が幼すぎるとしても、押歯皇子が大王とならぬ理由を問うて、皇子は腑に落ちる答えを聞いたことがなかった。

押歯皇子は、皇后の腹から生まれたのではない。誰の腹から生まれたか、誰も語ろうとはしない。

大王の御位に即くのは稚建皇子であって、押歯皇子ではない。

皇子は、ものごころついた頃からそう母に説かれてきた。皇子は一度たりとも、それを疑ったことはない。日輪が東の方より昇り、西の山の端に沈むように、誰が定めたというではなく、天地自然が生まれた時より決められていたかのように、群臣は皇子を敬った。

吾はいずれ大王となる。だが、大王とは何か。

父なる大王は、皇子が生まれる前に崩御した。以後、執政は母なる皇后の司るところとなっていた。いずれ吾は大王となる。だが、大王とは、「なる」ものなのか。

押歯皇子の堂々たる体躯とくらべ、稚建皇子は、手足は枝のように細く、貌は「女童のよう」と宮女たちは囁きあう。背丈は、同い齢の男童とくらべても、掌の幅ほど低い。

五日に一度の朝、廟堂に面した王宮の広庭に群臣が連なる。皇子は、廟堂の階（きざはし）の上、母なる皇后の傍らに座す。居並ぶ男どもはみな、威圧するように大きい。大王は彼らを統べる。こわい髭を生やし、筋の盛り上がった腕を組んで踞る男どもは、みな恐ろしい。吾に彼らを統べることの、かなうや否や。

だが、押歯皇子ならば……。大王家の一族として廟堂に昇ることも許されず、群臣にまじって広庭にうずくまる異母兄ならば、彼らも恐れ畏むのではないか。

十二歳のころの稚建皇子にとって、押歯は、男ならばかくあるべき、己が、いずれ大王となるべき時までに、そのようになっているべき存在であった。それを思うとき、皇子は心のなかで呟く。

何故に押歯皇子ではなく、吾？

答えは常に決まっていた。

母なる皇后が、そのように定めたから。

だとすれば、三年前、押歯皇子が、ある朝、廟堂に姿を現さず、そのまま数日、朝儀に連なることもなく、やがて無惨に息絶えた姿をさらしたのは、そうなるべくして、なったのか。否。

異腹の兄は、殺された。母の手にかかって……。

押歯皇子は狩りを好んだ。

そして、狩りにゆくおりは、暗闇がまだ青いうちに出で立ち、日があかあかと落ちる頃、戻る。下部（しもべ）を二人従え、彼らがかつぐ棒に縛られた鹿や山鳥。押歯皇子は、馬にまたがり、隆々たる胸を張り、傲然と見下すように、戻ってきた。そんな風景を何度も見た。常ならば、どこかひねこびた眼差しに、大きな体を縮めるように歩き、そのくせ、臣や宮女にものを問われれば、王家の血筋を無用に誇るかのように、さげすんだ口振りを浴びせる皇子が、狩りから戻るときのみは、さわやかに威風を払い、みごとなますらおぶりであった。

狩りどころではない、夏の夜に篝火に誘われて迷い込む虫をすら恐れた稚建皇子は、山野に馬を走らせ、ぴんと張りつめた弓を引いて、鹿や鳥を狩る押歯皇子の姿に、いずれ大王としてヤマトを統べる男はかくあるべきと見た。

ゆえにあの日、皇子が、夜が明けぬうちに寝屋（ねや）を抜け出し、押歯皇子の屋敷の門前で、異母兄が馬に乗って門を出ていくのをひそかに待ち受けたのは、やがて大王位につく聖なる日継（ひつぎ）の皇子としては、当然の行為であった。

押歯皇子が走らせる馬の後を、三人の下部は必死に駈けた。稚建皇子も駈けたが、しだいに遅れ、姿を見失った。野を走り、山道を息を切らせて歩き、こころぼそく林を抜け、そして谷に出たときに、皇子は見た。

女たちのけたたましい笑い声に、皇子は反射的に木陰に身を隠した。

三人の女たちが、輪をつくってうずくまる男を取り囲み、指さし、脚をあげて背を蹴り、

嘲り笑っていた。
「皇子よ」
その声は、皇后に使える宮女の八須女。
「ふぐり玉を、足蹴にされるのは、初めてか」
「ただの一蹴りで、立つこともできぬ。皇子ほどの健児(ますらお)が吾ら女相手に、そのざまは」
あれは香和女。
「もはや男ではないのかも」
葉津女の驕奢なまでに幼い声に、女たちはまた声をあげて笑った。その笑いを浴びて、男は顔をあげた。
押歯皇子……。
豊かに髭をたくわえた精悍な貌が、苦痛と屈辱に歪み、その眼から涙が落ちていた。弱々しく、救いを求めるように、女たちの貌を見つめ、首を動かす度に、おおきな五体が苦しげに震えた。
「なにゆえ、吾を弑せんとする……」
声が、童のように弱々しかった。肩がすぼみ、その巨躯を縮めるように座る、その股間に両手があてがわれていた。
「心を安らかに。皇子の御魂(みたま)までは奪わない」
八須女が、哀れみの眼を投げかけた。香和女がひきとった。

「奪うのは、男としての御魂。これより皇子は、女として生きる」
「吾らと同じく、胸乳が生えてくるやも」
葉津女が、豊かに盛り上がった乳房を両手でつかんで笑った。
「男としての……」
皇子の瞳が恐怖に震えた。
「然り。かくのごとく」
八須女が、輪から離れた。水の流れる巌の上に、三人の下部がうつぶせに倒れていた。見れば、三人とも、股間を両手で押さえ、苦しげにもがいていた。
八須女は一人の下部の腰のあたりに膝をつき、両手で尻を押して仰向けにした。そして、右手を両脚の付け根にあてがい、腕に力をこめた。
下部は、激しく身をそらし、手足をむなしく動かした。八須女は唇の端をわずかにゆがめ、激しく痙攣する下部の青ざめた貌を眺めていた。
陰で見ていた稚建皇子は、咽喉の湿りが乾き、ざらざらとした気が不快に刺激するのを覚えた。同時に、腹の底の、さらに底から、得も言われぬ心地よさが立ち上ってくるのを感じた。
皇子は、いつしか右手で己が股間をつかみ、ふぐり玉をゆすぶるように弄んでいた。
下部がまたも絶叫し、背を浮かせて腹を虚空に突き出し、ばたりと動かなくなった。
八須女がつかんだ白い袴(ズボン)の股間の部分が、みるみる赤く染まっていった。彼女は、ぴ

くりとも動かず、白眼をむき、口から血反吐を垂らす下部の躯（からだ）を転がし、川に落とした。そして、凍り付いたように眼を見開いて震える押歯皇子のもとに歩み寄った。

「ふぐり玉を潰した」

潰す、という八須女の言葉に、稚建皇子は、身を震わせた。

恐怖ではない。

かれの掌中に、薄い肉の袋に包まれた二つの玉があった。

なんのために、下腹部に垂れ下がっているのか。湯浴みの度に、皇子はときに長いこと、視線を落として肉の袋を見つめることが多かった。

和香女が、もう一人の下部の股間をつかんだ。同じ光景が繰り返された。

押歯皇子は、滝のように涙を流し、言葉にならない呻きを喉から絞り出し、掌に捕らわれた虫が逃げ場を求めて右に左に這い惑うように、躯をよじっている。

股間を両手で押さえたまま。

和香女にふぐり玉を潰された下部の躯が、ゆっくりと水に沈み、股間から流れ出る赤い血が、川の水面（みなも）にうっすらと広がっていった。

もう一人の下部は、片手で股間を押さえてよろよろと立ち上がり、歯を食いしばり、よたよたと稚建皇子が潜む林に向かって逃げ込もうとした。

葉津女が、薄ら笑いを浮かべながらゆっくりと下部の背後に歩み寄り、右脚をはねあげた。足の甲が激しく下部の股間を打った。

下部は貌を真上に向け、両手で股間を押さえて棒立ちになり、膝をつき、仰向けにどうと倒れた。葉津女はその襟首をつかんで起こし、抗う力も残っていない下部の背を木の幹に押しつけ、膝をその股間に何度もたたきつけた。彼女の膝が股間に打ち込まれる度に、下部は激しく泣き叫び、やがて口から血を吐き、骨が溶けたようにくずおれた。

「汝の下部は、もはや男ではない」

八須女が和香女に目配せし、二人して両脇から押歯皇子を抱きかかえ、立たせた。葉津女は、血が噴き出す股間を押さえ、眼を見開いて悶絶する下部の喉笛を踵で踏みにじり、骨を砕いて後、皇子の背を支えた。

「仕得たり」

川のそばの葦の茂みから声があがった。見れば、茂みから、華やかに紫の巾（スカーフ）を肩から垂らし、薄い絹の衣に身を包み、首に勾玉の飾りをかけた女が、ゆっくりと盛り上がった乳房を揺らしながら現れた。両の耳たぶから垂れ下がる黄金の飾りが、歩みとともに揺れて重なり合い、涼やかな響きをたてた。

三人の宮女が膝をつき、腿に掌を乗せて畏まった。

母……。

息長皇后が、肉付き豊かな妖艶な四肢を動かし、望みを絶たれたようにうなだれる押歯皇子に歩み寄った。

「汝も亡き先の大王が皇子。無様なるかな」

皇后は驕慢な美貌に残忍な笑みを浮かべ、打ちひしがれた皇子の胸に、人さし指をあて、すっと腹部におろし、股間をぎゅっとひねりあげ、激しく震えて悲しげな叫びをあげる押歯皇子の頬を、舌を突き出して舐めた。

「膳臣(かしわでのおみ)の娘の閨(ねや)に、夜な夜な通うておると聞いた」

皇后は、なぶるようにもう一度、押歯皇子のふぐり玉を指で弾き、悲鳴をあげる様を悦しんだ。

膳臣は、王宮の食を司る豪族。十八歳となった大王家の子が、豪族の娘とまぐわうのは、禁忌とはされていない。

「皇后は……」

押歯皇子は、干魃(かんばつ)に干上がった地面のように、水気のない貌をあげて、皇后を見つめ、苦しげに声を絞った。

「吾が、子をなすを、皇后はさほどに恐れるか」

皇后の貌から笑みが消えた。

「かの、ひよわな稚建皇子に大王の御位(みくらい)を継がせるために……吾が子種を断つか」

ひよわな皇子。

稚建皇子は、しかし、筋肉の盛り上がった押歯皇子の胸板と、薄く肉の覆う痩せた己が胸を見比べつつも、かつて抱いていた、押歯皇子への思いが消えたのに気づいた。

吾は脆(もろ)い。

だが、押歯皇子もまた、脆い。

股間に垂れ下がる二つの玉を、女の手や脚で打たれる。それだけで押歯皇子の雄大な巨躯は力を失い、女たちのなすがままになる。

吾は弱い。

押歯皇子もまた、弱い。

「衣を剥げ」

荒々しげな皇后の言葉に、三人の宮女たちは、押歯皇子の肉体を覆う衣を破り捨てた。筋が巌のように盛り上がった美しい四肢がさらされた。

皇后は、丸太のような二つの太股の合わさる股間を、足で蹴った。

押歯皇子は身もだえし、泣き叫んだ。

女たちは笑い、皇子は泣いた。

股間に垂れ下がる肉袋は赤ぐろく腫れ上がり、同じ場所からのびている肉棒は……堅く天に向かって勃然と突き出していた。

稚建皇子の、小さな肉棒もまた、同様に堅くなっていた。腹の底から沸き上がる心地よいなにかが、肉棒の尖端の割れた部分に向けて、えたいのしれぬ何かを吹き出そうと渦巻いていた。

母はまた、押歯皇子の股間を蹴った。

皇子はもはや悲鳴をあげる力もなく、ただ四肢を激しく痙攣させるのみだった。

母はみたび、皇子の股間を蹴った。
思い響きとともに、皇子は口から血を吐いた。
母は四たび、皇子の股間を蹴った。
皇子の巨躯が大きく反り、股間の肉棒の尖端から、白い液体が固まりとなって噴出し、皇后の膝を塗らした。皇子の肉棒は急速に収縮し、同時に尖端から赤いどろりとした液がとめどもなく噴き出した。
押歯皇子は地にくずおれ、そのまま土盛りのように動かなくなった。
「押歯の種は、永く絶えた」
皇后は、頬を赤くたぎらせている宮女たちの貌を見つめながら言った。
「稚建皇子の御代は、盤石である」

母が三人の宮女たちを連れて谷を去り、ふぐり玉を潰された瀕死の男たちの躯が四つ残された後も、稚建皇子は、木陰に座り、右手で股間を握ったまま動かなかった。
やっと彼が立ち上がり、歩き出したとき、股間が暖かく濡れているのに彼は気づかなかった。

このころ、王宮のある難波より飛鳥にかけては、沼潟(ぬまかた)が多い。米のとれる田とすべく、民びとたちが腰まで水に浸して木鍬をふるう中、稚建皇子は畦道(あぜみち)をよろばい歩いた。

日が落ちかかっていた。山の端の空が赤く染まっていた。
「稚建皇子ではないか」
背後の声に振り返った。
輿(こし)をかつぐ四人の壮丁。その背後に伴の女童(めのわらべ)が二人。輿の上には、少女が膝を崩して座し、夕日を浴びて婉然と微笑んでいた。
春日郎女(かすがのいらつめ)。
稚建皇子より二歳上の十四歳。威勢をほこる豪族・大伴金村(おおとものかなむら)の娘。
白い絹(シルク)の袴(スカート)に、薄桃色の巾(スカーフ)。白い貌に大きな瞳が潤んだように光っていた。
稚建皇子は、軽く顎を引いた。郎女が合図をすると、壮丁はそっと輿を降ろし、王族を前に跪き、額を地につけて拝礼した。
また背が伸びたか……。
輿から降りて立った春日郎女は、皇子を見下ろさぬよう、膝を軽く曲げ、頭を垂れた。細い手脚がしなやかに長い。威勢も財力もヤマトの豪族のなかでかなうもののいない家に生まれ、伸びやかに育った美(う)まし乙女。
その姿かたちのごとく屈託のない性(さが)が、皇子には疎ましかった。
「皇子は、このようなところで、伴も連れず、何をなされていたか」
「ここは……」
「古市(ふるいち)の地。皇子は、御身がいずくに在るやも知らず、独り歩いておられたか」

覗き込むように、大きな瞳が皇子の眼を射抜いた。皇子は眼をそらした。春日郎女は返事を待たず、誘った。

「近くに吾が邸がある。夜が更けぬうちに宮までは帰りつかない。皇子よ、今宵は吾が邸にて休まれよ」

郎女はついと歩み寄り、皇子の耳元で温かく空気が動いた。

「邸には、吾と伴のものしか、おらぬ」

耳元の囁(ささや)きに、皇子は郎女の貌を見た。郎女は、言葉の底意を察せられぬよう、踵(きびす)を返し、壮丁どもに合図した。屈強な男たちは皇子の足下に輿を移し、再び跪(ひざまず)いた。

皇子を乗せた輿の後を、春日の郎女が女童たちとなにやら言葉をかわし、笑いさざめきながら従った。

大伴金村の本邸は、王宮に近い住吉にある。息長皇后は、年にひとたびはその地に足を運んだ。

きらびやかに飾った広壮な邸に入ると、大伴金村が太った躯を折り曲げて出迎える。母の伴をする皇子は、邪気のなさそうでいて時折油断のならぬ光が走る、童のように大きな眼を見るたびに、口中が乾き、背の筋が細かく震えた。

春日郎女は、必ず父の背後で微笑んでいた。足を運ぶたびに、郎女は背が伸び、幼い貌がしだいにうつくしく整っていった。

古市の別邸は、狩りの折りなどに使うために建てられた、小規模な仮屋である。着いたときにはすでに日が暮れ、闇のなかに沈んでいた。

壮丁たちが寝屋をしつらえ、女童たちが火を起こして膳を整えた。運ばれてきた膳には、稗飯(ひえかし)、干した川魚、栗が土器(かわらけ)に盛られ、並んでいた。

「皇子は狩りはされぬのか」

膳を挟んで向かい合って座した郎女は、多弁であった。

「何故に問う」

「古市は、狩り場。父も兄も、狩りを好む。押歯皇子も幾度も馬を走らせ、鳥や獣を追う。皇子は、狩りをするために古市を訪(おとな)われたのではないのか」

「否」

「いずくかの乙女を訪われたか」

郎女は、袖で口を覆い、喉で笑いを押し殺した。

「よもや吾を訪おうと、来られたわけでもあるまい」

肩がかすかに揺れていた。胸を覆った白い衣が、かすかに膨らみを見せていた。

郎女は手を打った。女童たちが現れ、膳を運んで去った。皇子は寝屋の奥に目をやった。草を編んだ筵(むしろ)が敷かれている。

「皇子は、今宵は一人、寝ぬるか」

郎女の言葉に、皇子は胸が締め付けられ、身じろぎひとつできなかった。郎女が、衣擦

れを鳴らして膝を進め、傍らに寄り添った。
その白い手が、皇子の股間に置かれた。

春日郎女は、未通女（をとめ）ではない。
未通女であることを尊（たつと）ぶ風は、未だこの国にはない。彼女は、誰に教わるでもなく男女のひめごとを覚え、すでに同族の若者ら三人と交わりを持っていた。
郎女のしなやかな長い指が、袴越しに皇子の陽物を巧みに撫でた。彼女は、男と交わって快楽を覚えたことはなかった。彼女の肉体は、そういうふうにはできていなかった。彼女はひたすら男に快を与えた。快を与えることに巧みだった。男たちは、彼女から快を与えられ、快を与えることができず、それによって彼女は、男たちの風上に立った。彼女の指使いで男たちは身悶えし、男たちの下に組み敷かれながら彼女は白い貌に冷静な笑顔を絶やすことはなかった。郎女と寝屋をともにした男たちは、郎女の思うがままとなった。
男とのまぐわいに快を覚えぬ春日郎女にとって、男女の交わりは、快を楽しむことではなく、彼らを征服し、支配することにほかならない。彼女は、同族の男たちとまぐわうことで彼らを支配することを覚え、そう意識することなしに大伴の一族における彼女の立場を強めた。寝屋で彼女に快を与えられなかった男たちは、彼女がある人の名を不快げに口にするのを聞き、その人を貶め辛く扱うことで、彼女を満たそうとした。
豪族の娘として春日郎女が、やがて大王となる日継の皇子と寝屋をともにしようとする

のは、自然な心の動きであった。彼女が生まれてまもなく、先の大王は崩御した。大王の御稜威を彼女は知らず、ただ息長皇后の威光はじゅうぶんすぎるほど知っていた。彼女自身は皇后の地位を望んだわけではないが、父なる大伴金村が彼女を皇后にと望んでいることは、知っていた。娘として父の意向に従うことに、ためらう理由はない。
彼女が稚建皇子の陽物を弄び、もう芽生えているであろう肉の欲を、彼女自身に向けさせようとしたのは、淫らな行為ではない。男性の精の源に触れる彼女自身は、躯に疼きを覚えるわけでもなく、心臓の鼓動もふだんに同じだった。やましさと裏腹の興奮や愉悦が身の裡に湧き起こらぬ以上、それが淫らな行為であるはずはない。
郎女は、大きな瞳を見開いて、皇子の貌を見た。
皇子は眼を閉じていた。唇が半ば開いていた。その隙間から、息が荒く漏れていた。ほかの若者と同様に。
だが、違うのは、股間の陽物が、同じ大きさと柔らかさとを保っていることだった。郎女は、かすかに苛立った。
「皇子よ」
郎女は、皇子の耳たぶを舐めるようにして囁いた。
「立たれよ」
皇子は、眼を閉じたまま立ち上がった。郎女は、その足下に跪き、帯を解き、袴を脱がせた。

皇子の陽物は、十二歳のそれにふさわしく、白く、なめらかな皮に覆われていた。その皮の尖端がわずかに開き、赤い肉が覗いていた。

郎女は微笑み、それを口に含み、舌を動かし始めた。だが、口のなかの陽物は、毫も変化を見せなかった。

「否」

皇子の苦しげな声に郎女は貌をあげた。皇子は、眼を開き、魚油の灯火に照らされた暗い天井を見つめていた。

「否……」

もう一度、繰り返された。郎女は、不意に自らの行為の淫らさに、寒気を覚えた。皇子に拒まれ、初めて恥ずかしさを覚えた。あからさまに拒まれたのではないだけに、郎女の屈辱は深かった。彼女は膝をついたまま後ずさりし、立ち上がった。

「春日郎女よ」

皇子の声に、いったん身を翻した郎女は、再び首を曲げて貌を向けた。

皇子は、下半身をさらしたまま、眼に涙を浮かべていた。

「郎女よ」

皇子はもう一度、声を振り絞った。

「来(こ)よ」

郎女は首を傾げ、眼に険を浮かべた。

「皇子は、吾を拒んだ」

「拒んではいない」

「吾を拒んだ。皇子は拒まずとも……」

郎女は、皇子の柔らかな陽物に眼をやり、袖で貌をおおった。

「郎女」

皇子が歩み寄ってきた。郎女の白い手をとり、自らの股間にあてがった。

「これを……」

郎女の掌の上に、小さな肉のかたまりが二つ、薄い肉皮越しに感じられた。

「これを、強く握れ」

春日郎女の驚愕した貌を、皇子は嘆願するように見つめていた。

郎女の屈辱とは別の、さらに深い屈辱を皇子も覚えていた。彼は、その陽物が堅くなったことがなかった。男女の交わりの際、男子のそれが勃然とそそり立つことを、皇子は知っていた。自分の陽物がそうならないことも、皇子は知っていた。

皇子に、郎女と同じ行為をなそうとした豪族の娘は、いた。彼女らは、春日郎女と同じく、まず指で弄び、ついで口に含んだ。それでも皇子の陽物は、動かなかった。彼女らは、郎女と同様、袖で貌を覆い、去った。

皇子の陽物は、今日、はじめて勃った。押歯皇子や、その下部たちが、母なる皇后と三

人の宮女どもに、ふぐり玉をいたぶられ、潰され、苦痛に身を震わせながら男でなくなる様を見て、皇子の陽物は勃った。押歯皇子が、断末魔の悲鳴をあげるように、陽物から精をほとばしらせた瞬間、皇子の陽物もまた、激しく「快」を覚えた。

春日郎女は、口を閉じ、その黒く潤んだ瞳を動かすことなく、皇子を見つめている。皇子はさらに言った。

「ふぐり玉を……強く握れ」

「痛くはないか」

郎女は眼をそらし、問うた。言葉がこわばっていた。

「痛いであろう」

皇子は答えた。郎女は、驚いたように首を傾げ、皇子を見た。

「皇子は知らぬか。ふぐり玉を傷つければ、皇子の子種は断たれる」

「知っている」

皇子は、母なる皇后が押歯皇子に投げつけた言葉を思い浮かべながら答えた。

「激しく苦しみ、死ぬ事もあると聞いた。それでも皇子は、ふぐり玉を握れと言うか」

「言う」

皇子の貌は、悲しげにゆがんだ。菓子を取り上げられた幼童のようであった。皇子の貌に、郎女の心は冷ややかな落ち着きを取り戻した。唇に微笑みが浮かんだ。

いつしか郎女の心を苛んだ屈辱が癒え、彼女は、彼女に「快」を与えられなかった若者

ども同様、皇子が彼女の下に組み敷かれていることを悟った。

「されば」

郎女は、二つの肉のかたまりを掌中に収め、指に力をこめた。

悲鳴とともに、皇子の躯は大きくのけぞり、骨が溶けたように床にくずおれた。

両手で股間を押さえ、さらにふたつの太股で挟み込み、首はうなだれ、背を丸めた。

「皇子！」

郎女は狼狽し、膝をつき、皇子の貌を覗き込みながら、肩を揺すった。そこが男にとってもっとも脆い箇所であることを、郎女は知っていたが、そこを打たれて苦しむさまを見るのは、初めてだった。

揺すぶられて、皇子は身じろぎもせず、息づかいすら途絶えた。

「皇子！　皇子！」

泣き出すばかりに皇子を揺すぶる郎女に、皇子はやっと貌をあげた。

その貌に、ゆがんだ微笑みが浮かんでいた。

「郎女」

春日郎女の頬が、安堵で緩んだ。皇子は、そっとその手をとり、己が股間に導いた。不安げに細められていた郎女の眼が、再び大きく広がった。

皇子の陽物は、堅くそそり立っていた。

「さらに、いたぶれ」
皇子の眼に、強い光が漲(みなぎ)っていた。唇がさわやかに微笑んでいた。郎女は微笑みを返し、さらに強く、皇子のふぐり玉をひねりあげた。
皇子は叫び、のけぞった。後頭部が床に打ち付けられた。郎女は、皇子の陰嚢から右手を離さず、皇子が倒れるがままに、おおいかぶさるように、左手を床についた。
目をつぶり、苦痛に耐える皇子の口元に、満たされたような笑みが消えることなく浮かんでいた。その微笑みが、郎女の屈辱を消し去り、形容しがたい喜びを、彼女の内奥に芽生えさせた。
郎女はさらに、皇子のふぐり玉をひねった。そのたびに、皇子は身を震わせ、苦痛と歓喜の入り交じった悲鳴を発した。陽物は、ますます堅く、熱いたぎりがはちきれんばかりに膨らんだ。
郎女はさらに大胆だった。右膝を股間にあてがい、一度宙に浮かせ、強くたたき込んだ。
皇子は眼を見開き、大きくのけぞり、痙攣し、そして気を失った。
だが、その股間の陽物は、天に向かってそそり立ったままだった。

「皇子……」
郎女は、いとおしげに稚建皇子の頬を撫でた。
皇子の貌は幼く、うつくしかった。やがて大王となる皇子としては頼りない、と囁く群

臣もいたが、春日郎女は、皇子の幼さや頼りなさを愛でた。
郎女は身を起こし、皇子の下腹部を見つめた。そそり立つ陽物に、貌を寄せ、ふたたび口に含んだ。軽く歯を当て、唇と舌を動かし、皇子に男としての喜びを与えた。
皇子の腹部の筋がびくりと動き、上半身が半ば起き、すぐにゆっくりと床に伸びたのを、郎女は、皇子が彼女を受け入れた証と見た。やがて、陽物の尖端から、精がほとばしり、郎女の口中に満ちた。
「皇子……」
郎女は胸をはだけ、じゅうぶんな膨らみを見せる胸乳で皇子の貌を覆い、全身を上下に激しく動かしはじめた。
それは、彼女が生まれてはじめて味わう「快」であった。
やがて春日郎女は大きく身を震わせ、満ち足りた表情で、皇子の傍らにうつぶせに伏せた。

「皇后、いまだその軍をおえざる間、懐妊(はら)ませられるが、すなわち御腹を鎮めたまわんとして、石を取らせて、御裳(みも)の腰に纏(ま)かして、西の国より帰りましまして後、その御子は産まれましつる」
史人の朗誦は続いていた。
息長皇后の眼差しが、稚建皇子に向けられた。息長皇后の輝かしき西征のさなか、彼女

は皇子を懐妊し、軍の最中に子が産まれることを恐れ、腹帯に石を巻き、出産を遅らせ、ヤマトに帰還して後に産んだとされている。

ヤマトの大王家が海を渡って西の国を征服したさなかに、皇后の腹に宿った子。

稚建皇子は、そっと視線をあげて、庭に跪く豪族たちを見た。

豪族たちは、史人の朗誦に合わせ、皇子を崇めるように眼差しを注いでいる。

偽りの崇拝。

皇子は、豪族たちの眼に、ひそやかな軽侮の念を読みとった。ただ一人、大伴金村のみが、厚いまぶたで眼を半ば覆い、足下を見つめている。

皇子は、しばし金村を見つめた。金村は、ふと眼をあげ、かすかに唇を歪めて笑みをつくった。

三年前の、あの夜以来、春日郎女との秘め事は絶えることなく続いていた。

苦痛を与えられねば「快」を得ることのできぬ皇子と、苦痛を与えねば「快」を得ることのできぬ郎女との逢瀬は、ヤマトの王宮に出入りする豪族たちの間にすでに知られるところとなっていた。

春日郎女の父、大伴金村は、娘がやがて大王の御位に即く日継の皇子と深い仲となったことを喜び、皇子の母、息長皇后にとって、稚建皇子の後ろ盾として大伴一族は悪くない選択であった。

ヤマトには、その財と兵力で抜きんでている三つの豪族があった。

大伴金村。

葛城円（かつらぎのつぶら）。

平群真鳥（へぐりのまとり）。

息長皇后の眼には、なかでも大伴金村こそが、大王家に従順な一族と映っていた。東の蝦夷を討つべく、軍を遣わしたおり、葛城と平群の兵に、征討軍の編成を命じたのは、数年にわたるであろう外征で、この二つの豪族の軍事力が削がれることを期待してのことであった。

たとえ、皇子と郎女の逢瀬が、常の男女のそれと異なっていようと、それが大王家の行く末を保証するものならばよしとする。

やがて、皇子は郎女を皇后となし、大王の御位に即く。残忍な母と、狡猾な金村は、そうなることを望んでいる。皇子の行く末は、すでに史人が描く物語に埋め込まれている。

皇子は、かすかな嫌悪を覚えた。三年前のあの日、母なる皇后は、押歯皇子の種を断った。同じ日、皇子は大伴金村の娘と、寝屋での秘め事をなしたのだ。

「かくして四海は治まり、臣も民も、国の栄（さかえ）を言祝（ことほぎ）ぎぬ」

史人は朗誦を終え、皇后と皇子に向かい、三拝して額ずいた。

豪族たちが手を鳴らし、土を足踏み、歓声をあげた。

酒が運ばれ、面をつけた俳優（わざおぎ）どもが舞い、楽人がかき鳴らす鼓や琴の音が、闇をあかあかと照らす篝（かが）り火とともに、中庭を華やかに彩った。

喧噪の片隅で、稗田の史人(ふひと)が、竹簡を巻き上げ、布で包み、そっと庭を去っていくのが、皇子の眼に映った。

稚建皇子は知っている。稗田の史人どもは毎日王宮に召され、皇子が幼きころからその英明さで臣らを感嘆させてきたという類のくさぐさの物語を、皇后とともに練り上げている。やがて皇子が大王位を継ぐとき、夜の王宮に召された諸豪族の前で、史人によって朗々と誦み上げられよう。

まことの皇子とは、いずくにありや。

酒に酔い、床を踏みならして踊り、手を打って謡うひとびとのなかにあって、ひとり物思いに沈む吾か。

これから史人の筆で竹簡に描かれる国史のなかにありや。

皇子は、そっと股間を握りしめ、指に力をこめた。かすかな、しかし鋭い痛みがふぐり玉を貫き、陽物が膨らんだ。

皇子の脳裏に、春日郎女の白い貌が浮かんだ。

まことの皇子は、郎女と過ごす寝屋にのみ、ある。